

NY生活ウーマン

週刊NY生活は、家庭や職場、学校で美しく生きる女性たちを応援します。



「日本の美肌」を世界に広める

エステティシャン 静・バーンステインさん

ロックフェラーセンターの建物群に囲まれた6階の待合室の広い窓から、マンハッタン特有のオフィス群が上にと伸びているのが見える。58丁目のパーク街とレキシントン街の間から、ここ51丁目の五番街と6番街の間に引越してきてちょうど今年で8年目になる。床面積3000平方フィートのスペースに施術の部屋が6室。美容整形医2人とエステティシャンとテクニシャンが常駐する。1万7000人に及ぶ顧客リストのなかには、常連客としてハリ・ポッターのエマ・ワトソンやサタデーナイト・ライブのクリステ

リン・ウイグ、アメフトのピッツバーグ・スティーラーズの元コーチ、ビル・コーワー氏やデザイナーのノーマ・カマリなど錚々たる顔ぶれが並ぶ。ベッカムやトム・クルーズもこの大ファンだという。2003年と5年に雑誌『ニューヨーク』が選ぶベスト・オブ・ニューヨークに選ばれ、2007年には『ニューヨーク』グループ・インスティテュートが選ぶ『ライジングスター(新星)』賞にも輝いている。2008年にはウグイス科の鳥の糞を使ったゲイシャ・フェイシャルが「日本の美肌」を作ると大評判となり、皮膚科医で夫のロバートさんの監修の下で作ったアンチエイジングのスキンケア商品品ズカ・ニューヨークも好評だ。

こんな順風満帆の人生に見える静さんだが、乗り越えてきた試練も少なくない。東京で生まれ、3歳で始めたバレエがきっかけで芸能活動時代を過ぎた光塩女子学院中、聖徳学園高を経て東洋女子短大へ進み、同短大卒業後、1980年にサンフランシスコ大学へ。2年間の留学中に知り合った日本人留学生と帰国後結婚して2男をもうけ、87年には夫のニューヨーク転勤に伴い4人家族の妻として再び来米した。幸せな駐在生活が待っているはずだったが、仕事一辺倒で家

庭を顧みることのなかった夫とのすれ違いの日々が続きとうとう離婚に。2人の息子を引き取り、ダンススタジオを経営したが失敗。その一方でオリジナル投資家になったブルーマン・グループの興業が大成功して救われたりの紆余曲折を経てアメリカ人医師のロバートさんと再婚、長女ニキータさんを身籠った時、覚悟を決めた。「アメリカで生きていく」と。

「身体さえ丈夫なら生きていけるように手に職を」と考え、それなら28歳から客として馴染んでいた美容の世界しかないと思いついた。月後には当時住んでいたNJ州フォートリーに近い地元の美容専門学校に通っていた。子供たちが中学、高校の頃、仕事と家庭の両立が辛くてつい「シンドイ」とも思ったことがある。

「普通の人には子供を生む前から仕事をしているけど、マミーは子供ができてからキャリアを積んでいるのだからかたがたないよ。頑張るつきやない」と慰めてくれた。その息子の言葉が、いまでも支えた。

(三浦良一記者、写真も)



NYファッションウィーク タダシ、ロシアのイメージで



ニューヨーク・ファッションウィークで連続12回目のランウェイショーを迎えた「タダシ」ブランドの

庄司正氏は、昨年サンクトペテルスブルグを訪れて今シーズンのデザインのテーマとした。

ロマノフ王朝の崩壊で貴婦人たちは百姓女に変装してシベリアの雪原を逃げさまよった。そんなイメージでロシア帝国の貴族文化と民族文化を融合した。7日のランウェイショーでは、長袖のドレスが多く見られ、色もロイヤルブルー、黒などの暗く重々しい色をサーモンピンクや中間色でバランスをとった。生地はリッチなシルク、ベルベット、シルクシフォンでソフトなシルエットを造り出し、伝統的な刺繍に寶石

をあしらったものもある。新しい生地として、ウェットスーツに使われるネオプレンを薄くしてレースを重ねたものがある。計39点を発表した。

同ブランドはサックス・ファイフス・アベニュー、ニーマン・マーカス、ブルームینگデルズ、ノードストローム、三越、伊勢丹などの高級百貨店をはじめ4000店以上、世界40か国以上で販売されている。(ワインスタイン、今井絹江、写真も)